

## 三都の国立博物館訪ねある記(慶州・台北・北京)

久保田 昌 兌

この四年の間に近隣三国の博物館中心の観光旅行を経験したので、そのことについて少し紹介をしたい。

そのひとつ目は、お隣の韓国の慶州国立博物館と仏国寺観光である。平成二十年四月、日本よりも歴史・文化の古い韓国の新羅(三五六年)の王都であった慶州を訪ねた。そこに向かう街道は日本に負けないようなサクラ並木であった。その中を二十三ヶの円墳(古墳)公園と発掘品を展示している天馬塚古墳を見学した。多くの野生のリスがおり又屋根のない博物館とも云われているのが印象的であった。そこから少し離れた所に韓国有数の名刹仏国寺がある。日本の聖徳太子のころ(六世紀)の創建であり随所に石の文化を見る。国宝でもある野天の釈迦塔と多宝塔は高さが十米もある石の彫刻芸術の傑作である。仏国寺から又桜並木を通り国立慶州博物館に向う。一九七五年に開館したこの博物館は古墳時代から新羅時代までの十萬点以上の遺物を所蔵した博物館となっており内戦、の歴史のため多くのものも失っているが、充分見応えあるものとなっている。その二つ目は、平成二十年十月の台湾・台北市にある国立故宮博物院である。三時間の拝観であったが一日見ているも飽きることはない。中国本土北京の紫禁城の中身をここに運んできたのだから、

蒋介石は今でも片や国賊・片や国父となっている。その数六萬五萬点、よくこれだけのものを革命戦争中に傷めずに運びだしたものである。従って中国本土ではいまだ恨み骨髄である。

紫禁城は建造物の観光となり、中身は空っぽ同然となっている。展示物は見応えのあるもので、例えば書聖王羲之の書、書画では郭熙の「早春図」など国宝級の名品が数多くある。又最高峰の陶磁器や珍しい玉器の数々、そして珍玩彫刻はその神業的技術に圧倒される。

私は今、土産に購入した「故宮名品案内書」という本を見ているのだが、今でもその感慨に胸のときめきを覚える。機会があればぜひ再度行きたい気持ちがつる。

その三つ目は、本年平成二十四年春の北京観光である。天安門広場と故宮博物院そして天壇公園で一日の日程である。テレビでよく見る天安門広場だがその面積は、収容可能人数百万人の計算で設計されている。四方を、南が正陽門北が天安門、東が中国国家博物館、西が人民大会堂、中ほどに毛主席記念堂がある。南から北の端まで歩き地下トンネルを通って天安門の中に入る。ここから北へ1km 孫文の銅像を左に見ながらいよいよ紫禁城の入口の午門から入る。次の太和門の先が皇帝の儀式的の間となる太和殿である。映画「ラストエンペラー」の儀式的の間はここだそうである。次の中和殿と保和殿まで外朝と呼ばれる男の仕事場で、その先の乾清門から先を内廷と呼び男子禁制の場所、即ち皇帝と女子と宦官の世界となる。

台湾の故宮博物院の宝物はここから全部運び出されたというわけである。紫禁城の最北は神武門であり、周囲は河と掘と土塀で守った城なのである。

翌日は万里の長城を歩いたが北方の匈奴対策とはいえ、秦の始皇帝即ち紀元前の時代から建設し始めたという、山の尾根づたいに日ぼしレンガで造った道であり、歩くのは急な坂もあり相当な運動量であり筋肉痛となった。

よくこんな道をつくったものだと不思議な感じがする。

次の日には北京郊外の周口店に向った。中学時代に勉強した北京猿人遺跡の観光である。展覧館にて説明を聞き、展示品を見た。その後一九二九年に発見された洞窟の現場を散策した。昔を思い感慨ひとしきりであった。



清 翠玉白菜 (故宮博物院)